

# 再編し、集約する

## - 近未来型就住一体施設 -



### 00. 背景

2050年  
装着型デバイスのカメラやセンサーなどを駆使して仮想世界の情報を現実世界に重ね合わせて体験するMRグラスの登場は社会現象となった。

かつてのスマートフォンと同様に爆発的に広まり、誰もがそれを所有する時代。  
モノと情報の境目がなくなり、社会構造の変化への対応を求められる過渡期。

人々の生活、特に-労働・消費・居住-は大きく変容していくだろう。

我々建築に関わる者が過渡期の今できることはなんだろうか。

この時代の技術を用いればかつては不可能だった奇抜な形態、情報とリンクした機能など可能性は無限大だ。  
しかし私はこの時代だから作れるモノではなく、変わりゆく社会、そこで生活をする人々に寄り添った場所づくりがしたい。

# 01. 変化する生活の軸

## 居住・労働・消費

人の生活はこの3つの軸から考えることができる。  
この軸における人々の動きは近代化とともに集約されていったが、今では技術の進化と共に分散し始めている。

これまでの集約化する社会の構造は人々の生活の場所を制限していたが、今ではその場所の制限から解放されたわけである。

しかしながら、人々の活動の場が分散化すれば、デジタル情報を介さない生の交流が減少していくことは明らかである。

人々は集まることで交友関係を育み、小さな領域でそれぞれの役割をこなすことで住む環境、働く環境を作り出していくものである。  
そのため、分散化による人間関係の希薄化は無秩序な社会の創出に繋がりがかねない。

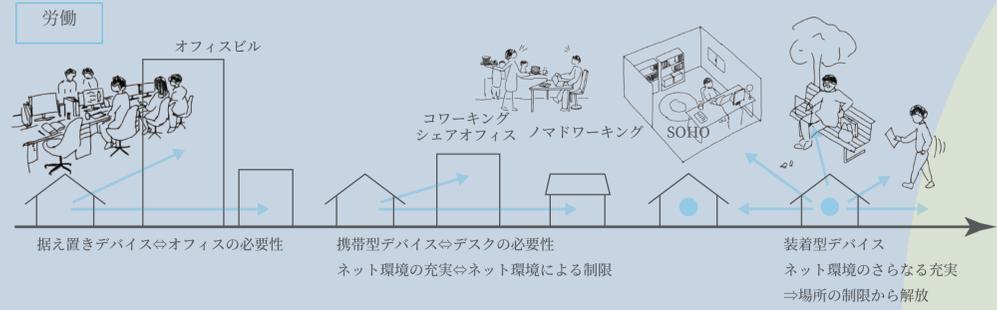
# 02. モノとシステム

分散化による脅威に対抗するには再度集約してしまえばいい。  
しかし、機能主義的な集約ではなく、より良い場を創出するため、再編して集約するのだ。

居住と労働においては建築は必要不可欠である。  
この2種類の空間を1つの建築物の中に散りばめることで、小さなまちを作りだす。  
そして全国にこの施設を整備し、施設間の移動を自由にしてあげれば、分散化した先で人々が集まって暮らし、集まって働くことが可能な新しいネットワークを作りだすことができるのではないだろうか。

しかしながら小さなまちとは言え、大規模な建築物になり、それを各地に新築することは難しいだろう。  
既存の大規模ストックを活用することが望ましい。

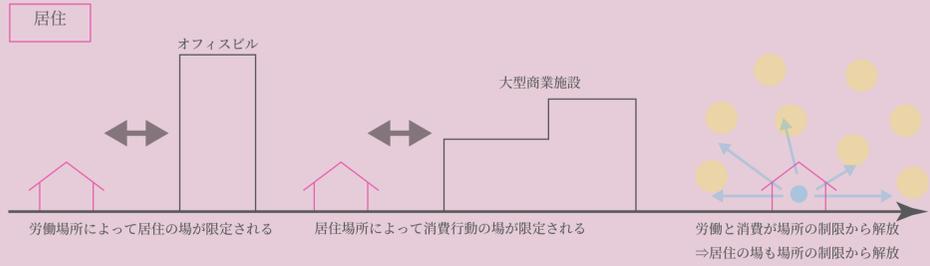
そこで全国各地に点在する、社会の変容に取り残された商業施設を活用する。



労働者は働く場所の制限から解放される  
⇨人々はそれぞれが好む労働の場を求め始め、必要とされる空間は従来よりも多岐にわたる  
様々なスケールで働く場を与えることは、同時にその場の提供者や従事者を生み、職の需要を増やすことにも繋がる



MRグラスが普及した社会では販売店の需要はなくなり、消費行動において特定の場所  
は必要なくなる  
人物のトラッキングによる宅配ドローンでの配達を行えば受け取りの場さえ自由になる  
⇨人々は消費行動という体験を求め始め、目的を失った商業施設は大型のストックとして残留する



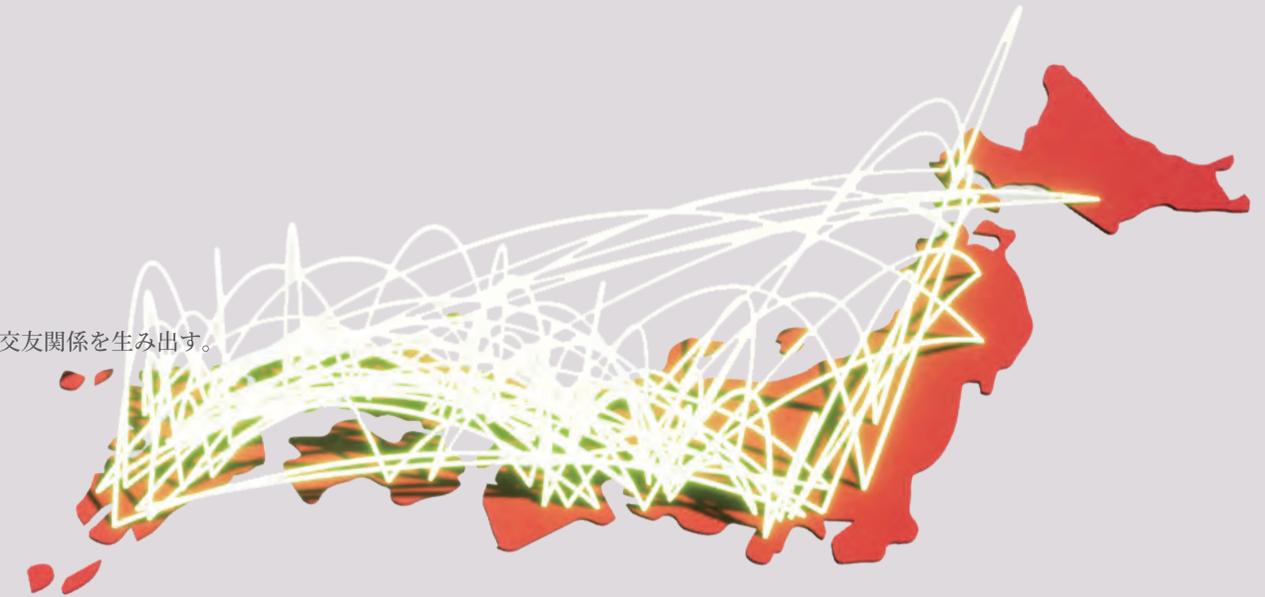
MRグラスが普及した社会では労働、消費行動が場所の制限から解放され、  
固定の場で居住する必要性がなくなる  
⇨人々は季節、気分、趣味趣向に合わせてあらゆる場所を転々とし始める

### 03. 広がるモノとサービス 集まる人々

各地の商業施設をコンバージョンして生まれる新たな施設は、事業提携されサブスクリプションによってすべての施設が利用可能となり相互の移動は容易になる。従前の商業施設の個性を踏襲したその施設はそれぞれが異なる色を持ち、形態も様々である。

集合施設とホテルの中間の様な住居性能と機能を持ち、労働者とその家族やの滞在や、単に宿泊施設としての利用も可能であり、その施設に従事する人々との関係性など多様な交友関係を生み出す。

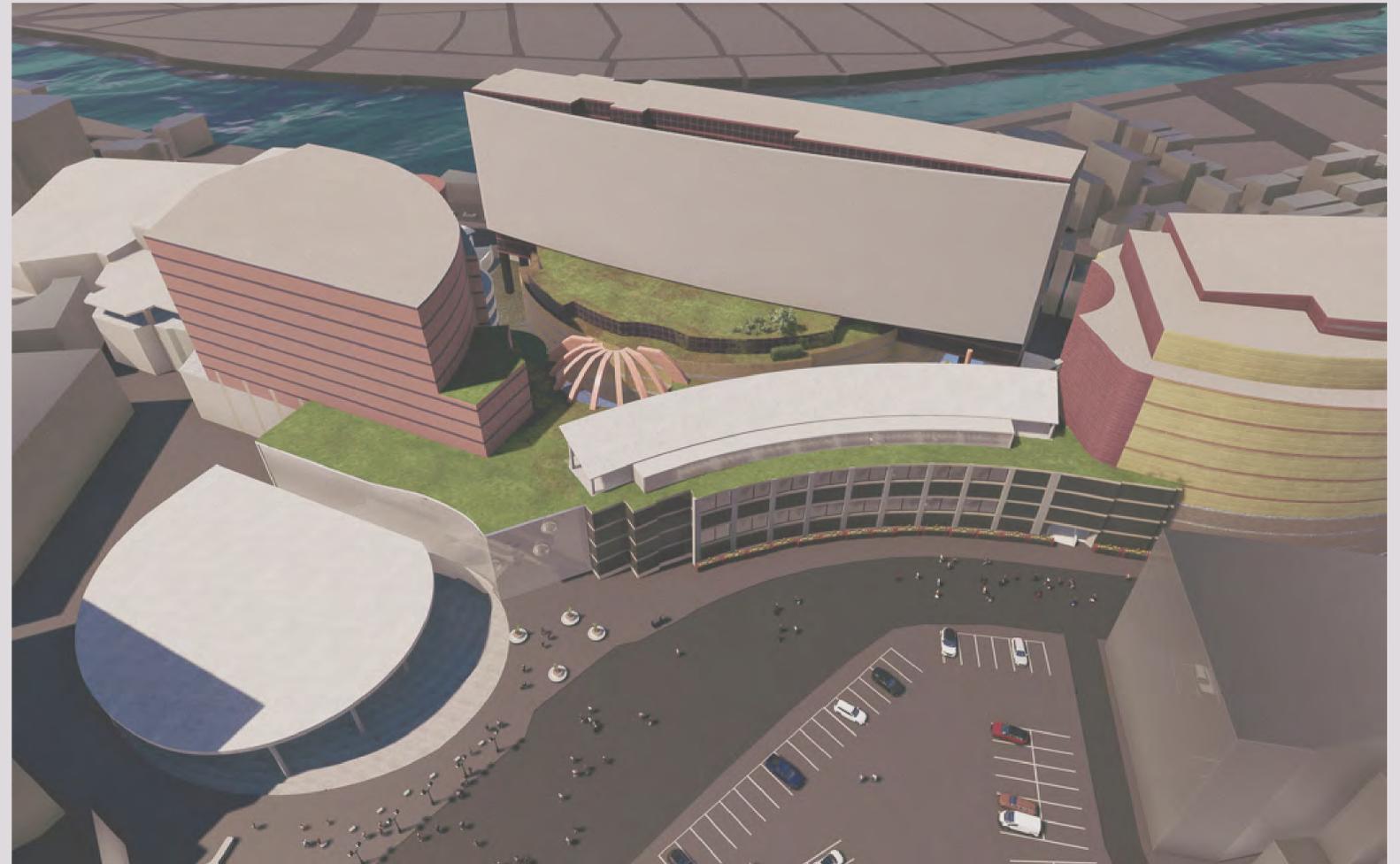
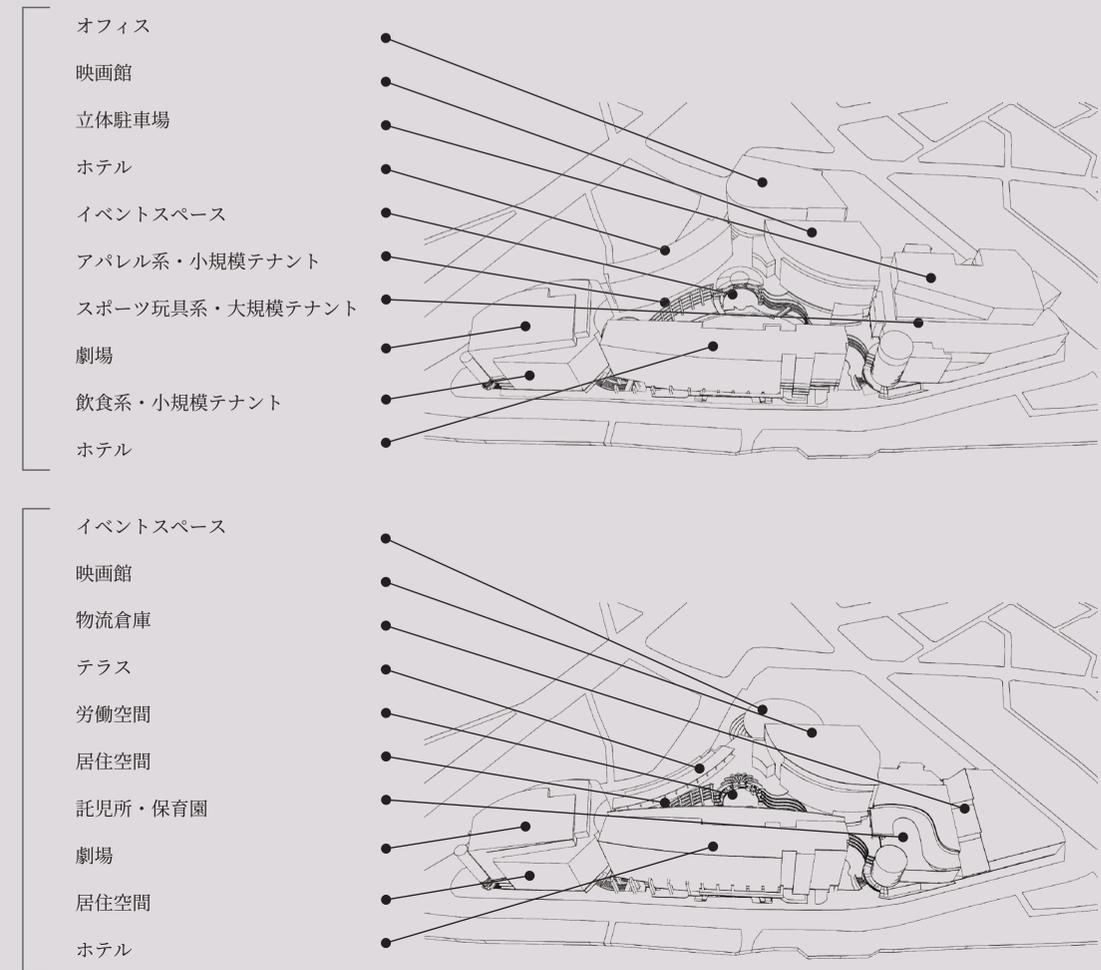
これを生活の拠点とし、人々は季節、気分、趣味趣向に合わせてあらゆる場所を転々とし始める。ある人は1か月毎に、ある人は数日や数年など不規則に拠点を変え、またある人は気に入った拠点に生涯住み続けるといったことが可能になるのだ。



### 04.1 例として

この施設の1例として、福岡県に50年ほど前に開業したポストモダンの複合商業施設「キャナルシティ博多」をコンバージョンした施設を考案する。キャナルシティ博多は都市の劇場というコンセプトの基に地域住民に愛され続けてきた。名前の通り底に流れる運河は特徴的である。

施設の一部は減築し、一部は用途を変更せずそのままの形で機能を維持する。運河を囲った形態や、人は真っすぐ歩かないという設計者の考えの基で生まれた蛇行する共用部の形態など、キャナルシティ博多を想起させる部分はそのままに、主にテナント部分をコンバートしていく。



## 05. 都市から繋がり都市に繋がる

これらの施設によって生まれたネットワークにより都市間交通は活性化するだろう。

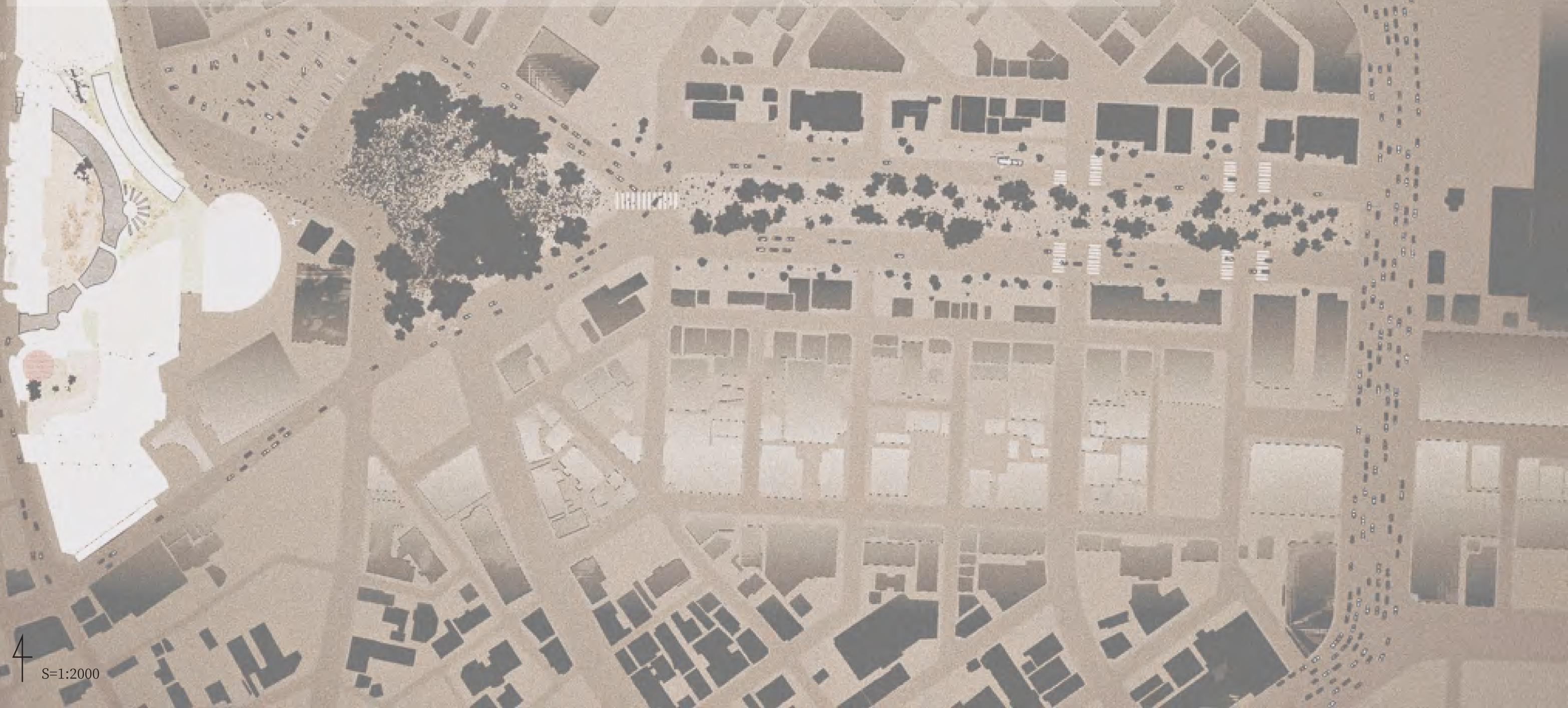
同時にビルの需要は低下し、都市のオープンスペースの需要は高くなるため、インフラ整備とともに道路は拡幅され歩行者・自転車・セグウェイ等の為の空間はより豊かになっている。

福岡において博多駅は多くの交通の結節点である。

再開発された博多駅から続くこの道はキャナルシティ博多を挟んで博多と天神を繋ぐ軸線にある。

従前は運河を中心に大きなヴォリュームに囲われ内部に別世界を築いていたが、コンバートするにあたってはより開いた形態としてこの道に開かれるべきだろう。

道に直接面した部分のヴォリュームは減築し、外部とする。ここにはかつてのキャナルシティ博多が持っていた都市の劇場としての機能を想起させる形態のパブリックスペースを配置することにする。



## 06. 小さなまちの創出

商業施設は我々の生活とは異なるスケールの空間性を持っている。

このスケールの違いを利用すれば、現在では欠かせないセグウェイ等のモビリティや宅配ドローンを個人宅の玄関先まで届ける為の動線を通すことができる。

居住の為の機能としてこの施設に求められるのは戸建て住宅や簡素な集合住宅とは異なる空間性である。

既存の中・大規模なスケールの空間を賢沢に利用し、ネットワークを介した日常的な非日常空間を作り出すことがこの施設の特徴とも言える。

労働の為の機能として求められることは何だろうか、基本的には様々なスケールの空間を提供することである。

そしてそれらを一つの建築物の中に作り出すことで、それらのあいだの領域に空間性を持たせることができる。

需要が低まった大規模なモノを活用できる今だからこそ創出できる開かれた都市空間は、労働者に新たな労働環境を提示することに繋がるだろう。



手前右

従前はホテルが建っていた商業ヴォリュームの屋上部分  
この施設と博多駅とを結ぶ道路への視線の抜けを意識し、シンプル  
で居やすい空間となる

奥左

既存のホテルの機能は維持しているが、この施設は従前の機能である  
商業施設とは異なり、昼夜問わず人の活動があるため、ホテルと  
施設とを隔てる壁を設置する

この壁は防音壁となる他、施設側に湾曲した大曲面はどの場所から  
みても平面をトラッキングすることができるため、MR (AR) を活  
用したスクリーンとしても機能する



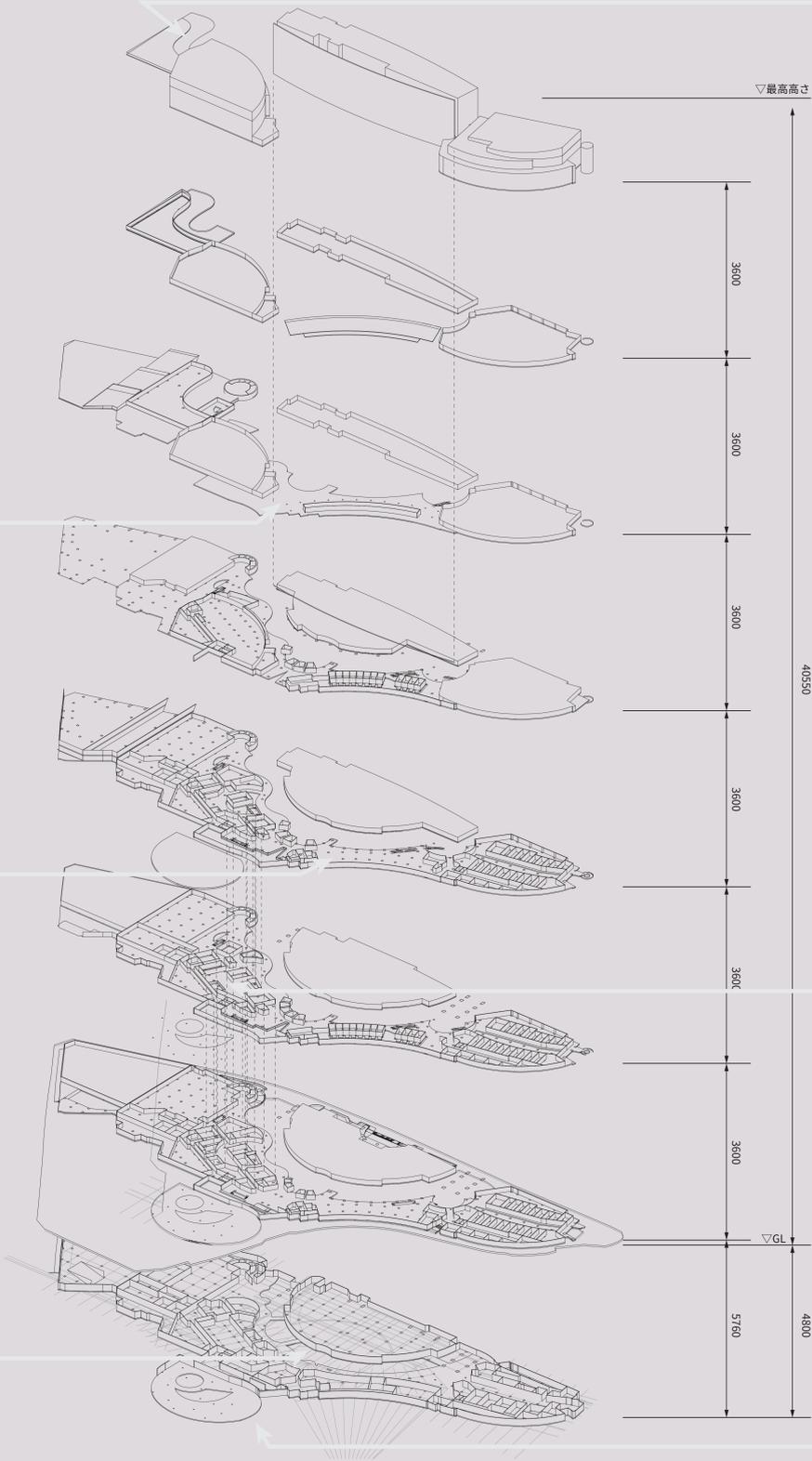
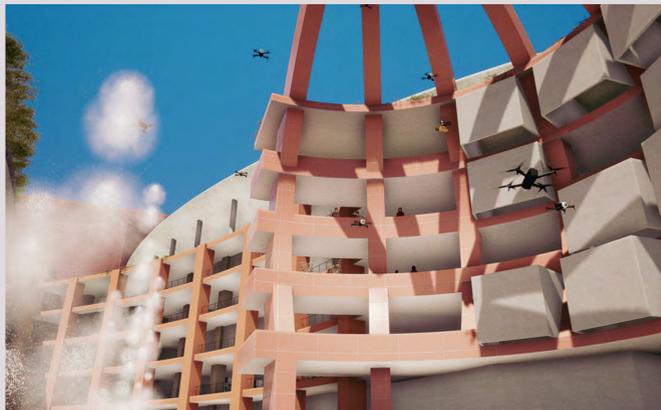
居住の為の機能を持つ空間

スラブを切り出し、2層吹き抜けの空間とする

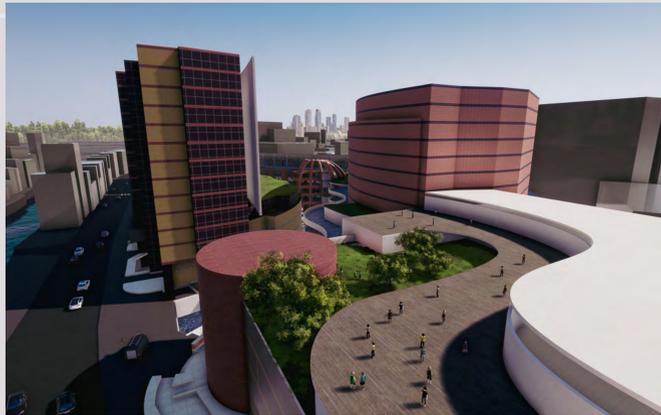
居住機能を2層目に設けることで1層目に自転車やセグウェイ歩行以外の移動動線  
を通し、2層目にはドローン等の動線を通すことができる

各住居へは、大面積の空間を賢沢に転用し、それぞれに階段でアクセスする  
共用通路が各戸に分断されたような形態となり、小規模な庭空間として、宅配ドロー  
ンの着陸場として機能する

1層目は奥にある食堂と連続したリビング・ダイニング空間となり、各々が他人であ  
り同僚の様な関係性の中で生活を共にする



キャナルシティ博多の特徴ともいえる運河を囲んだ半球状のヴォイド空間  
最大限に最高を採るため屋根を取り払い、小規模な単一の労働空間のユニットを挿入するこ  
とで、労働者とそうでない人々が共に運河を囲うことができる空間とする



従前は立体駐車場であった部分

託児所であり保育園である機能を設ける

大きなヴォリュームに囲われたこの施設において唯一面前の川へ開けた空間  
となり、同時に博多駅側の喧騒な都市に背を向けた落ち着いた場所とする

ポストモダンの特徴が色濃く表れる他のヴォリュームとは異なり、川と共に  
自然を感じられるようなデザインと対比させることで子どもたちのための  
別世界を創出する

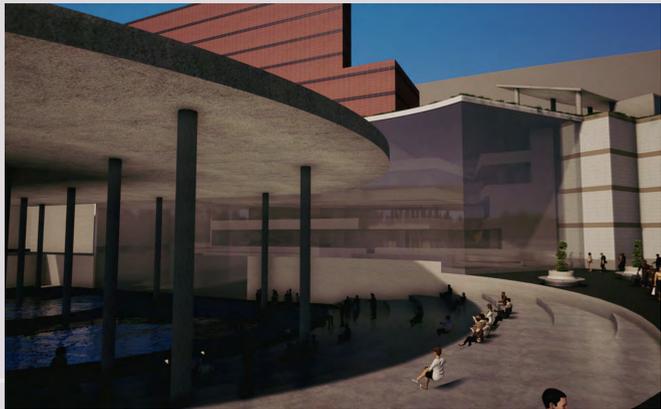
労働者の為の空間

この上下層と共に3層で構成される

1層目は商業施設のテナントをそのままオフィスやカフェにしたような空間であ  
るが、それぞれに異なる天井高を持たせ、2層目や3層目まで突き抜けるものを  
作ることで壁と天井で構成される空間に多様性を生む

2層目であるこの空間には1層目のヴォリュームが飛び出しており、それら  
に囲われた従前は共用部であった部分が労働の空間となり1層目と対比される

3層目にスラブを切り出す部分があるいくつかあり、新たな都市空間である2層目を  
見下ろすことができ、テナント部や共用部に労働空間が点在する1、2層目を  
ハイブリッドした様な空間とする



従前はオフィスビルがあった部分

分散化によってオフィスビルは不必要となるため、博多駅との関係性  
を意識した外空間とする。

これまでキャナルシティ博多で行われてきた様々なイベントを行う場所  
をこの場が受け継ぎ、ガラス張りの吹き抜け空間を介して施設内部と  
視線をつなげることで、地域住民に愛されたキャナルシティ博多を従  
前とは異なるかたちで都市に開いていく

S=1:1110